

実践報告

高等学校「歴史総合」における，概念的な知識を深める 授業の実践

—「国民国家と明治維新」の単元を通じた探究的な活動—

渡 辺 研 悟

1 問題意識の所在

平成30年度の高等学校学習指導要領改訂により新科目「歴史総合」が設定された。新しい学習指導要領では，科目の目標に「概念などを活用して多面的・多角的に考察」すること，「課題を主体的に追及，解決しようとする態度を養う」（p. 56）ことが記されている。こうした点を踏まれば，歴史の授業では概念を活用しながら，主体的に課題を追求，解決する探究的な学習に取り組むことが求められていると言えるだろう。

概念の活用については，澤井（2017）や澤井・加藤（2017）による理論の整理と実践例があり，探究的な学習については，田中（2017）による理論の整理と実践例がある。そこで，これらの理論を「歴史総合」の授業実践に落とし込むことで，学習指導要領の目標を達成できると考えた。

学校現場では「歴史総合」について様々な試行錯誤が試みられているが，本報告は，大項目B「近代化と私たち」の中項目(3)「国民国家と明治維新」の単元内容を扱ったものである。

2 授業のねらいと実践の概要

本実践では生徒の探究する力を育むことと，探究的な学習を通じて自らの学習を改善していく態度を育むことをねらいとした。探究的な学習では，「概念などを活用して」考察を行うことが大切である。澤井は「概念とは体系化（構造化）された知識のことで，概念を活用したり，膨らませていくのに必要なのが『問い』である」（澤井2017, p. 35）と述べており，「なぜか，特色は何か，どのようなつながりがあるのだろうか」（澤井はこれを「社会を読み解くための問い」と呼ぶ），といった「問い」の考察を通して，「社会的事象間の関係や特色（本質）などを考え，更なる概念的な知識を獲得すること」（澤井・加藤, pp. 41-42）が目指す授業の姿だとしている。本実践では，社会を読み解くための「問い」を国民国家の形成の観点から設定し，それまでの授業で習得した知識や概念を活用しながら事象間の関係を考察することで，生徒の概念的な知識を深めることを目指した。

授業開発に当たっては、田中の作成した「探究的な学習のための活動系列モデル」(田中 2021, p. 29) が有効であると考へ、「学習の手引き」(資料1) を作成した。「学習の手引き」は探究的な学習の手順と観点を明確化した冊子型の書き込み式プリントで、「生徒主体の課題解決的な学習に必要な支援を可視化するものであり、高度な探究的な学習を実施する高等学校でこそ必要なもの」(田中 2021, p. 41) である。なお「探究的な学習のための活動系列モデル」は「①導入、②課題設定、③計画立案、④調査・実験・実践、⑤学び直し、⑥考察・作製、⑦討論・表現、⑧価値づけ」の8ステップと、「A 思考、B 対話、C 評価、D 改善、E 創造」の5コアから成る。

資料1の「深い学びのプロセス」は活動系列の内容を高校生向けにやさしく言

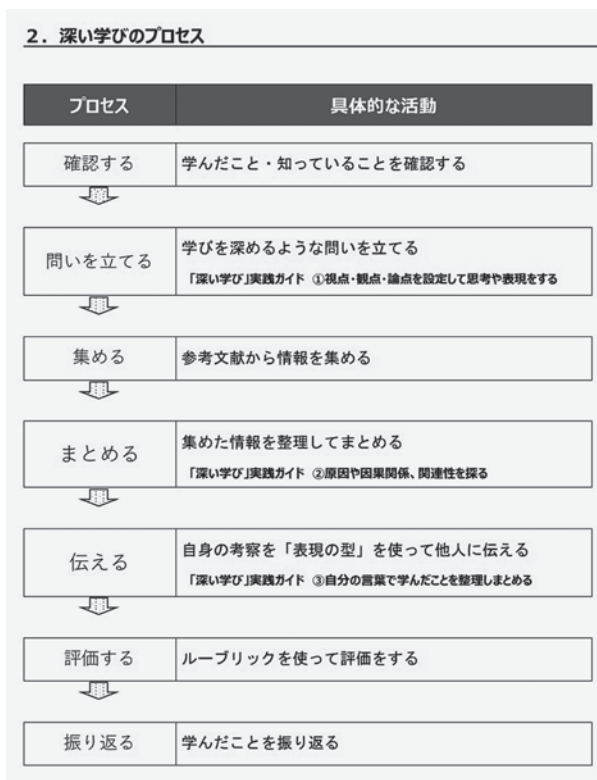
い直しているもので、「活動系列モデル」の①が「確認する」、②が「問いを立てる」、③・④とAが「集める」「まとめる」、⑤・⑥とBが「伝える」、⑦とC・Dが「評価する」、⑧とEが「振り返る」の中で取り入れられている。また、ルーブリックを用いた相互評価やICT機器を用いた情報検索の手順の提示などを行うことで、生徒の探究的な学習を促した。本報告ではこれらの成果を、単元終了後に行った学習評価アンケートや生徒の成果物から検討していく。

なお、本実践の対象は神奈川県立A高校(普通科)2年生4クラス(生徒148名)で、必修科目「日本史A」において「歴史総合」を想定して行った。授業時期は2021年7月から夏期休業期間をさみ9月までの4コマである。

3 学習指導要領と本実践の内容上の関連

(1) 探究的な学びと本実践の関わり

『高等学校学習指導要領解説』(平成30年告示、以下「解説」)の「歴史総合」では、探究的な学びについて、「生徒自らが主題を設定し、これまでに習得した歴史の概念を用いたり、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせたりして、諸資料を活用して主体的に多面的・多角的に考察、構想し、表現する活動」と説明している(解説p.182)。このうち、「生徒自らが主題を設定し」は「学習の手



資料1 「学習の手引き」(一部)

引き」の中の「問いを立てる」、「習得した歴史の概念を用いたり」は「確認する」、「諸資料を活用して」は「集める」「まとめる」、「主体的に多面的・多角的に考察、構想し、表現する活動」は「伝える」「評価する」にそれぞれ対応する。

「歴史的な見方・考え方」は「時期や推移などに着目して因果関係などで関連付けて捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史について考察したり、歴史に見られる課題や現代的な諸課題について、複数の立場や意見を踏まえて構想したりすること」（解説 p. 125）と説明されていることから、指導要領の内容を「問い」やルーブリックの観点として取り入れた。「現代的な諸課題の形成」（解説 pp. 151・167・182）については、「自由・制限」「平等・格差」「開発・保全」「統合・分化」「対立・協調」の観点が示されているが、「近代化の歴史に存在し、現代社会においても調整が求められ、将来においても引き続き生徒たちが直面することの予想される事柄を含む問いを設定することが求められる」（解説 p. 152）ことも踏まえ、本実践では国民国家の形成に着目させた上で、「統合・分化」の観点を問いやルーブリックに示した。

（2）単元の内容

新学習指導要領の中項目（3）「国民国家と明治維新」の内容をさらに具体的に確認したい。中項目（3）の小項目では、知識について「18世紀後半以降の欧米の市民革命や国民統合の動向、日本の明治維新や大日本帝国憲法の制定などを基に、立憲体制と国民国家の形成を理解すること」、思考力・判断力・表現力について「国民国家の形成の背景や影響などに着目して、主題を設定し、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、政治変革の特徴、国民国家の特徴や社会の変容などを多面的・多角的に考察し、表現すること」が求められている。（解説 p. 147）

そのため、この単元では国民国家の形成を取り上げ、国民国家の形成に関わる三つのテーマ（啓蒙思想・自由民権運動・学校教育）を提示し、生徒が「国民国家の特徴や社会の変容などを多面的・多角的に考察し、表現すること」を目指した。

4 実践の内容

本実践はこれまでの学習で学んだ近現代に関する知識を前提にしつつ、そうした事実的知識や意義・意味などの概念的知識を活用していくことで、近代化や国民国家の形成を多面的・多角的に考察していくものである。このような授業を通じて、近代化や国民国家について、更なる概念的な知識を獲得していく構成になっている。

（1）指導と活動の流れ

資料1の深い学びのプロセスのうち「確認する」は以下の小見出し（a）・（b）、「問いを立てる」は（c）、「集める」は（d）、「まとめる」は（e）、「伝える」は（f）、「評価する」は（g）、「振り返る」は

(h) に、それぞれ対応した内容となっている。

(a) 深い学びとは何かを理解する

探究的な学びでは、最初に学習のねらいを説明することが重要である。調べ学習と探究的な学びの違いを理解させ、「情報のコピーアンドペーストではなく、自分で集めた情報をもとに考え、疑問を解決すること」「身につけた知識を活かして考えること」が大切であると伝えた。

(b) 知識を確認する

国民国家の概念を確認するため、「新政府はどのような国を目指したのか」「そのような国を目指した背景は何か」をグループで考えさせた。筆者はこれまで対話的な学習を行う実践を論文にまとめてきたが（渡辺 2013・2017・2021）、対話的な学びは「各教科等における優れた授業改善等の取組に共通し、かつ普遍的な要素」（学習指導要領解説 総則編 p. 117）とされており、グループ活動を行うことで意欲的に知識を獲得できると考えている。

(c) 問いを選び仮説を立てる

国民国家に関する知識を確認した上で、以下のⅠ・Ⅱ・Ⅲの三つの問いを示した。生徒はの中から取り組みたいものを一つ選び、問いに対する仮説を書いた。

- Ⅰ 国民国家の形成に対して啓蒙思想が果たした役割は何だろうか
- Ⅱ 国民国家の形成に対して自由民権運動が果たした役割は何だろうか
- Ⅲ 国民国家の形成に対して学校教育が果たした役割は何だろうか

これらの問いは指導要領で求められている「国民国家の特徴や社会の変容などを多面的・多角的に考察」（解説 p. 147）することを生徒が見失わないように設定したものである。探究的な学習では「生徒自らが主題を設定」することが望ましいが、今回の実践では考察の観点を絞った問いを生徒に選ばせることにした。

(d) 資料を探す

小論文を書くために必要な資料として、教師が与える資料、生徒が探す資料の二つを示した。

前者の資料については、教師が参考文献から抜粋した文を Google Classroom 上に PDF で公開し、生徒が利用できるようにした。後者の資料については、書籍や辞典から参考文献を探す方法、Google Scholar や CiNii など論文検索サイトから参考文献を見つける方法、書籍サイトの利用法を「学習の手引き」に示した。

単元の2時間目、3時間目は資料探しの時間とし、生徒は図書室で参考文献を探したり（写真1）、教室でパソコンやスマホを利用して論文を探す（写真2）など、それぞれの方法で必要な資料を集めていった。なお、図書室で資料を探す場合、司書教諭は強い味方となってくれた。司書教諭に相談し、参考文献を取り寄せてもらう生徒もあり、司書教諭との連携は探究的な学習を成功させるための重要な要素だと考えられる。

(e) 情報を整理してまとめる

収集した情報は、「学習の手引き」の情報カード（資料2）にまとめた。



写真1 図書室で参考文献を探す生徒



写真2 スマホでCiNiを調べる

調べたこと 国語・運動会・唱歌の役割

記述内容（重要な事実・筆者の主張）どちらかに○ 引用するときは「」を付けて書きましょう。

- 「言語教育政策は、国民国家形成の基盤を整備していくものであり、国民意識の醸成という面からも重要な役割を担うものである。」
（人為的な）日本語の統一／方言の排除
- 運動会は近世から続く村祭りの用事を多く含み、近世代の人に受け入れられた。一方で運動会は「娯楽」→「競争」、「無秩序」→「秩序」、「村の遊び日」→「国家の祝祭日」というような天皇中心の国家・国民形成を目指す政府の意図があった。
- 現代では娯楽的用事の強い歌が別の時代には統治者の政策に利用されることもあった。

参考文献 『国語・運動会・唱歌を通じた国民意識の形成：国民意識の客観的把握をめぐって』中学校社会科の單元開発と実践 千葉大学教育学部研究紀要 第68巻 p287~293 (2020)

資料2 生徒が作成した情報カード

情報カードは、記入する情報を「重要な事実」と「筆者の主張」の二つのカテゴリーに分けること、引用と要約の違いを踏まえて記入することを示した。カードに記入する情報が引用であれば、「」をつけて抜き出す。要約であれば、参考文献に書かれた内容の要約の仕方を手順とともに示した。このように、情報の整理の観点からまとめ方まで丁寧に示すことで、多くの生徒が参考文献を活用した小論文の作成に向けて一步一步、歩みを進めることができた。資料2の生徒は「統合」の視点を踏まえた記述ができています。これはあくまで一つの事例であるが、情報カードに概念の活用、時間的な推移を記述できている生徒が他にも見られた。

(f) 表現する

生徒は選んだ問いで300字以上500字以内の小論文を作成した。小論文は夏休みの課題とし、休み

明けに提出とした。小論文の作成にあたっては小論文の型（資料3）を示した。資料4の小論文では運動会が近世の村意識の払しょくのために用いられたことや、唱歌が国民意識を育むものであり、現代でも思わず口ずさんでしまうことが書かれており、指導要領の因果関係や現代的な諸課題の視点が反映されている。

内容	割合 (目安)	基本形・書き出し
問いの提示	10%以下	「国民国家の成立に対して①②③が果たした役割は何だろうか」
意見提示	20~30%	「先ずいえるのは…」 「一般的には…」 「第一に…」 など
展開	40~50%	「一方で…」 「しかしながら…」 「見方を変えると…」 「第二に…」 など
結論	10%以下	「以上により…」 「したがって…」 「結論として…」 など

資料3 小論文の型

国民国家の形成に對して学校教育が果たした役割は何だろうか。第一に、国民国家形成に向けて作られた学制は五か条の誓文に基づいており、あくまでも立身出世のためだと強調している。だが政府としては、教育力を向上させることにより富強な国家へ導くことが狙い（松田2020、p.2）があった。同時期に行われた言語教育政策も、工場や軍隊などで確実に指示を理解するものだとも言える。
一方で、この時代の学校教育は国民国家形成とは関係のないように思える運動会と唱歌があった。現代でも行われていることだが、実は政府の隠された意図があった。運動会は近世の村祭りのようだったが、娯楽から競争、村から国家というふうな国のまとまりとして秩序を作る狙いがあった。また、唱歌は現代でも歌を口ずさんでしまうように、歌詞に露骨に示された国民意識を高める言葉を自然と浸透させやすかったのだらう。
以上により、国民国家の形成に對して学校教育は、秩序ある国のまとまりを教育、運動会、唱歌など多様な面から自然と意識させるものだったと言える。

資料4 小論文「国民国家の形成に対して学校教育が果たした役割」の例

(g) 相互評価を行う

相互評価シート（資料5）にはルーブリックを示し、他者の小論文を読み、点数とフィードバックのコメントを記入した。フィードバックを受けた側は、参考になったことや改善点をまとめた。相互評価を行うねらいは、対話的な学びの中で自らの考えを相対化することである。相互評価の際にルーブリックを利用することで、完成度の高い小論文に向けたフィードバックを受けることができる。

相互評価が早く終わったグループには、身に付けた概念的な知識を活用するため、国民国家の形成に関係する新聞記事「中国における愛国教育の実際」の考察を行わせた。中国では教育が国家形成にどう利用されているかを扱った記事を読み、生徒は学習した知識を交えて考察を行った（資料6）。

(h) 学びの振り返りを行う

「学習の手引き」の中の「身についたこと・学んだこと」、「学習への取り組みにおける改善点」を記入した。

(2) 探究の特色ある活動

探究的な活動における資料活用の指導については「どのような資料が活用できそうだろうか」、「それらの資料はどこで収集できるだろうか」、「その資料は設定した主題の探究に有効であるだろうか」（解説 p. 183）などの発問が例として挙げられている。本実践でも教員側が資料を提示するだけでなく、「学習の手引き」を用いて生徒が主体的に資料を収集できるようにした。また、情報の整理では「重要な事実」「筆者の主張」の観点で分けることや、引用や要約を区別して整理できるよう工夫を凝らした。

01 自分の小論文を読んでもらい意見をもらう

評価基準表（ルーブリック）			
	① 知識の活用	② 参考文献の引用	③ 現代的な諸課題への着目
4点	今までに習得した知識を5つ以上踏まえて、自分の考えを、説得力を持って書くことができる。	因果関係を説明するために自ら採った参考文献から引用できている。	「統合・分化」について、現代との比較を踏まえた自分なりの考察が書かれている。
3点	今までに習得した知識を5つ以上踏まえて、自分の考えを書くことができる。	因果関係を説明するために参考文献から引用できている。	「統合・分化」について自分なりの考察が書けている。
2点	今までに習得した知識を踏まえて自分の考えを書くことができる。	参考文献から引用できている。	「統合・分化」に着目した記述になっている。
1点	今までに習得した知識を活用していない。	参考文献からまったく引用できていない。	「統合・分化」に着目した記述ではない。

① _____ さん ① 3点 ② 4点 ③ 3点 合計 10点

知識の活用 参考文献の引用 現代的な諸課題への着目

意見を送る観点を一つ選んで○をつける

文献と知識を効果的に活用している点と、現代的な課題への着目も、この点より高く感じた。

② _____ さん ① 4点 ② 3点 ③ 4点 合計 11点

知識の活用 参考文献の引用 現代的な諸課題への着目

意見を送る観点を一つ選んで○をつける

当時の運動会や唱歌と現代での運動会でも比較することで国民国家形成において根強く結びついていると推測できて、より統合の強さを表わしている点と良かった。

02 もらった意見から参考になったこと or 改善できる箇所を考える

文献や知識で、伝えたいことは伝わっているように感じた。
意見が、確かに現代との比較はあっても現代的な諸課題は書けていなかったため、第三者の目線で読んでもらえて良かった。

3組 番名前 _____

資料5 相互評価シート（資料4の小論文に対する評価）

◎ 記事を読んで考えたことを書きなさい。

政府の着陸の良い点は子どもたちの自由と奪い、退利の教育と愛国心を強要している点に思われる。確かに愛国心は国力へのつながり、国民国家を目的とする点から見て、確かに必要である。しかし、その点から見て、先ずやることが政府が、その目的を達成し、そして、

資料6 新聞記事に対する考察

整理した情報を、歴史的な見方・考え方に基づいて活用する工夫が小論文の型とループリックである。小論文の型を踏まえることで、生徒は因果関係や比較を意識し、情報を整理しつつ論述することができる。また、ループリックを示すことで、習得した知識を活用すること、参考文献を踏まえて自分の考えを書くこと、現代的な諸課題に着目することができると考えた。

また、探究的な学習では試行錯誤が重要である。そのため、自らの学習を調整しようとする側面(文部科学省, 2019)として、ループリックの観点に基づいて相互評価をさせフィードバックを行った上で、「学習の手引き」で「学習の取り組みにおける改善点」をまとめた。

5 本実践の評価と考察

(1) 学習評価アンケートの結果をもとにした分析と考察

授業の最後に行った学習評価アンケートの質問内容は以下の通りである。

- 質問① 参考文献を活用して小論文を書くことができた
- 質問② 自分の言葉で、学んだことを整理してまとめることができた
- 質問③ 参考文献を探すのはむずかしい
- 質問④ 参考文献の情報を整理するのはむずかしい
- 質問⑤ 整理した情報から小論文を書くのはむずかしい
- 質問⑥ 原因や因果関係・関連性を意識して小論文を書くことができた
- 質問⑦ 歴史の知識を現在の出来事に結び付けることができた
- 質問⑧ 授業を通じて国民国家について理解が深まった
- 質問⑨ 歴史を学ぶことで現在の出来事への理解が深まる
- 質問⑩ 小論文を相互評価することは大切である
- 質問⑪ 学習の手引きがあることで探究的な学習がしやすくなる

①～⑤は、歴史の概念や諸資料を活用して考察、表現することに関する質問、⑥～⑨は、歴史的な見方・考え方を働かせることに該当する質問、⑩・⑪は、学び方に関する質問となっている。

探究する力を発揮できたかを聞く質問の結果を見てみよう。質問①、質問②に対する肯定的な評価

アンケートの回答(単位:%) 回答人数131人

	質問①	質問②	質問③	質問④	質問⑤	質問⑥	質問⑦	質問⑧	質問⑨	質問⑩	質問⑪
できた/そう思う	38.1	28.8	57.9	63.6	46.4	26.6	17.9	46.0	56.8	58.6	58.0
まあできた/ まあそう思う	43.9	51.8	32.1	26.4	37.9	51.1	37.1	48.9	32.4	35.0	37.0
あまりできなかった/ あまりそう思わない	11.5	16.5	8.6	9.3	13.6	16.5	32.9	5.0	9.4	5.7	5.1
できなかった/ そう思わない	6.5	2.9	1.4	0.7	2.1	5.8	12.1	0.0	1.4	0.7	0.0

（できた・まあできた／そう思う・まあそう思う）の合計は、それぞれ82.0%、80.6%であることから、参考文献を活用した文章の作成はある程度できていたと考えられる。実際に小論文の参考文献の欄に、97.2%（148名中）の生徒が参考文献を記載していたことは、参考文献の活用ができていた生徒が多かったことを示している。一方で、「あまりできなかった・できなかった」と回答した生徒は、自分が思い描いていたようには参考文献を活用できなかった意識があるのかもしれない。

質問③、質問④、質問⑤の回答からは参考文献を探したり、参考文献の情報を整理したりする活動は、難しいと感じていることが分かる。情報カードの例のように、多くの生徒はよく調べてきたが、参考文献の探し方、情報のまとめ方について、さらに丁寧な手引きを示す必要性を感じた。

質問⑥、質問⑦は「歴史的な見方・考え方」を踏まえた学習ができたかを聞く質問である。質問⑥「原因や因果関係・関連性を意識して小論文を書くことができた」に対して、肯定的な評価の合計は、77.7%となっており、多くの生徒が「歴史的な見方・考え方」を踏まえた考察ができたと考えている。一方で、22.3%を超える生徒が、そうした考察が不十分であったと回答している。生徒の小論文の中には、「小学校令が改正されたことで身分制度が解消された」など、引用箇所と考察との間に論理的な飛躍がある生徒も少なくなかった。ただし、生徒が書いた小論文を見る限りでは、ほとんどの生徒が原因や因果関係を踏まえた記述ができていたので、謙遜もあるのかもしれない。推測であるが、因果関係や関連性を意識して記述することに難しさがあるのだろう。「歴史的な見方・考え方」を踏まえた考察が無意識でもできればよいと考えるのか、それともメタ的に理解・自覚した上で、そうした考察ができること目指すのか、あらかじめ狙いとして考えておく必要があると感じた。なお、生徒は文章を原因や因果関係を意識して書いていたことは間違いないが、S評価（ルーブリックの全観点が4点）の小論文は、全体の21.3%であった。S評価の小論文は、資料と考察とが因果関係で誤りなく結びついており、用語も正確に使用されていることに加え、現代的な諸課題を考察するために、学習した概念的知識が応用されているものである。これは、学習指導要領が求めている深い学びを実現している小論文と言える。S評価の数が20%程度に留まったことは、原因や因果関係・関連性を踏まえるための指導が十分ではなかったことを示しており課題を残した。

質問⑦「歴史の知識を現在の出来事に結び付けることができた」に関しては45.0%、約半数と言ってよい生徒が、「歴史的な見方・考え方」を踏まえた考察ができなかったと回答している。逆を言えば、現代的な知識と歴史の知識を結びつけて考えられた生徒が55%いたということになるが、実際の小論文でそうした内容を書いていた生徒は数人であった。これは、小論文に落とし込めるほど、歴史の知識を概念として使いこなせるようになった生徒は少なかったことを示している。「解説」では「現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史について考察したり、歴史に見られる課題や現代的な諸課題について、複数の立場や意見を踏まえて構想したりすること」を求めているが、教員がそうした視点から授業することは比較的簡単であるとしても、生徒自らが歴史の知識を応用して現代的な諸課題との関連に気づくことは、時間をかけた訓練が必要なのだろう。今後の方策としては、歴史の知識と現代的な諸課題を結びつけるための思考の段階を整理し、年間のカリキュラムに落とし込む工夫

が考えられる。とは言え、質問⑧の肯定的な評価が94.9%、質問⑨の肯定的な評価が89.2%となっているので、現代につながる形で「国民国家」の概念を深めることができたこと、生徒は一定の手応えを感じていたことも示している。

学び方に関する質問項目⑩について、相互評価の活動への肯定的な評価が93.6%であった。また「学習の手引き」中の「学習への取り組みにおける改善点」の記述内容から、抽象的・概括的な改善点が述べられていた生徒が8割以上おり、改善への見通しを持つ生徒も一定程度見られたことは、生徒のこれからの試行錯誤につながると考えられる。しかし、具体的な改善点まで記述できている生徒は2割程度、発展的な学びの提案までできている生徒は5%程度に留まっており、高度な学習の改善については今回の「学習の手引き」では達成できなかった。

最後に、「学習の手引き」の評価について、95.0%の生徒が肯定的な評価であったことから、探究的な学習をする上で、こうした補助的なツールがあることは有効だと言える。とは言え、「学習の手引き」には改善の余地が多くある。生徒の思考を深め、試行錯誤を促すような、使い勝手のよい「学習の手引き」の作成が求められよう。

(2) 相互評価の分析と考察

資料5の「もらった意見から参考になったこと or 改善できる箇所を考える」に生徒が書いた記述内容を大きく「学習内容に関するもの」「学習方法に関するもの」に分けた。

前者については、「あまり現代と結びつけて考えられていなかったと感じた」「統合・分化について現代との比較をもっとできていたらなと感じる」「脱野蛮の戦争の正当化からの現代の反少数派意識の存在への流れに相互性を見出しづらいものになってしまった」など、現在との結びつきについて振り返りをしていた生徒が多かった。歴史総合では、現代的な諸課題の形成に関わる歴史の大きな変化として、「産業社会と国民国家の形成を背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したこと」を「近代化」と表し、そうした変化が、現代の社会の基本的な構造や、現代的な諸課題とどのように関わっているのか考察することが求められている。本実践では、そのような学びの視点が弱かった。今回のような授業を踏まえた上で、国民国家の形成が現代世界の構造をどう規定しているのか、国民国家の枠組みにともなう現在の国際秩序の課題は何か、国民国家が乗り越えるべき課題は何か、などの問いを、「近代化」で学んだ知識を活用して考察することを今後の課題としたい。

後者については、「国民意識を高めるためという考えを主張できるような参考文献が必要であると感じた」「参考文献の引用はできるだけ簡潔な方が、説明したいことを見失うことも少なくなると気づいた」「色々な参考文献を組み合わせると全体をまとめてしまい、自分の意見の提示が少し足りなかったと反省した」など、参考文献の活用に関する改善点を挙げる生徒が多かった。学習評価アンケートの結果から、多くの生徒が参考文献の活用ができていた一方で、活用のし方について課題を感じていることが分かったが、相互評価の記述からは、学習を改善していこうとする考えが具体的に読み取れた。このことから、参考文献の探し方、情報のまとめ方について、さらに丁寧な手引きがあると

良いと考えた。

(3) 小論文の記述の分析と考察

本実践の目的のひとつは、「社会的事象間の関係や特色（本質）などを考え、更なる概念的な知識を獲得すること」（澤井・加藤 2017, p. 41-42）である。小論文の採点の結果、148人すべての生徒が、ルーブリックの「知識の活用」の観点で4点中の2点以上であり、「国民国家」の概念自体を誤って使用している生徒は見られなかった。このことから、因果関係の問題等はあるものの、参考文献などで得た新たな知識を活用し、国民国家という概念をすべての生徒が深めようとしていたことは、手引きの成功と考える。こうしたことが可能だった理由は、資料1の「深い学びのプロセス」の「確認する」過程を、手引きを利用しながら段階的に進めたこと、また、教員が一方的に知識を確認するのではなく、生徒がグループで知識を確認したことで、学びのスタートラインをそろえられたことが考えられる。一方で、展開部分での根拠と結論部分での主張に飛躍が見られる小論文が少なくなかった。資料から言える以上のことを結論として導きだそうとすることが散見され、質問⑧に94.9%の生徒が肯定的な回答をしているものの、国民国家の概念をどの生徒も適切に深めることができたわけではないと考える。資料を都合よく活用しない指導が今後の課題だろう。

(4) 振り返りの記述の分析と考察

「学習の手引き」では振り返りの観点として「身についたこと・学んだこと」と「学習への取り組みにおける改善点」の二つを示し、記述させた。

「身についたこと・学んだこと」について、148人の生徒の記述内容を①知識・技能、②思考・判断・表現、③主体的に学習に取り組む態度（自らの学習を調整する力）に分類し分析した。その結果、「国民国家形成の重要性」「啓蒙思想の影響」「小論文の書き方」「引用の仕方」「参考文献の探し方」といった①に関する内容が身についたと記述していた生徒が67.8%、「文章を書く力」「仮説を立てる力」「情報をまとめる力」「参考文献から必要なことを読み取る力」など②に関する力が身についたと記述していた生徒が約55.0%、「難しかったが試行錯誤することで小論文を力が身についた」「できる気がしなかったが下手ながらまとめることができ自信になった」「間違った接続詞を使っていたことに気が付いた」「新たな歴史のつながりを見出す深い学びを得ることができた」「感想をもらうことで気づくことがあり、自分以外の目も大切だと学んだ」など自らの学習を振り返り、③に関する態度や力が身についたと記述していた生徒が57.0%であった（重複を含む）。

同じように、「学習への取り組みにおける改善点」について、生徒の記述内容を①抽象的・総括的な改善点、②具体的な改善点、③発展的な学びの提案に分類し分析した。どの生徒も何かしらの改善点について書くことができていたが、「もっと計画的に進めようと思った」「多くの論文を読めなかった」「情報集めに時間がかかった」「何を言いたいのか明確にしてから書くべきだった」「参考文献を熱心に探さなかった」といった、抽象的・総括的な①の改善点について82.6%の生徒が書いていた。

改善点として「現代との比較ができていなかった」「参考文献の引用元を省いてしまった」「文献を引用しただけで自分の考察と結びつけられなかった」「多くの情報を入れすぎて主題から考察がずれてしまった」「字数を気にせず書き始めてしまったので、文献のどこを引用するかを書く前に準備しておく必要があった」といった具体的な改善点が指摘されている生徒が20.1%、さらに発展的な学び方の提案として「引用しただけだと要点を自分の言葉で理解できていないと感じたので、自分の言葉でまとめるのが良い」「むやみやたらに情報を集めるのではなく、何を基軸として構成していくのかや、どのような結論にしたいかなどの道筋を立てた上で情報を集め、作文するべきだった」といった、自身の学びの改善策まで提案できていた生徒は5.4%であった。

6 これからの実践の課題と方向性

本実践を通じて、参考文献を探すことや情報をまとめることに苦戦していた生徒が多かったこと、「歴史的な見方・考え方」ができるように年間を通した指導が必要であること、概念的な知識を現代に結びつけることの難しさが浮き彫りとなった。こうした課題を踏まえつつ、日本史探究との接続も意識することが今後の方向として考えられる。また、本実践では「なぜ?」という深い問いや、与えられた言説を疑うような、本質的な問いを追求する探究を行うことはできなかった。こうしたことも今後の実践への課題としたい。

一方で、自ら主体的に参考文献を探した生徒が全体の7割近くいたことは予想外であった。自ら文献を探すことを推奨はしたが、強制したわけではなかったため、生徒の前向きな姿勢はうれしい誤算であった。論文検索サイトを使いこなし、参考文献を探した生徒の中には、大学の研究紀要から論文を引用し、明治期における運動会と国民国家の形成を見事に関連付けて論じた生徒もおり、教員として新たな学びを得ることも多く、採点作業も楽しかった。

「歴史総合」は今後も様々な教材が開発されるだろう。しかし、課題に向き合い、主体的に解決を追求していく学習に変わりはないはずである。時代の大きな変化の中で、歴史の授業も変わっていく必要があることを心に留めつつ、私自身も変わっていけるよう努力を続けたい。

【引用文献】

文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領』 東山書房

文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社

文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 東洋館出版社

文部科学省 (2019) 『学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編』 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-02.pdf

澤井陽介 (2017) 『授業の見方 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』 東洋館出版社

澤井陽介・加藤寿郎 (2017) 『見方・考え方 [社会科編] 「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは?』 東洋館出版社

田中博之 (2017) 『アクティブ・ラーニング「深い学び」実践の手引き』 教育開発研究所

田中博之 (2020) 『「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き 学ぶ意欲がぐんぐん伸びる評価の仕掛け』

教育開発研究所

田中博之（2021）編著『高等学校 探究授業の創り方 教科・科目別授業モデルの提案』学事出版

渡辺研悟（2013）「多様な資料を活用して、時事問題を考察し表現する授業の創造—高等学校における「現代社会」の活用学習を事例として—」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第5号

渡辺研悟（2017）「「経済的視点から考える信長の天下統一事業」の実践を通じた思考力・判断力・表現力を育む授業開発」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第9号

渡辺研悟（2019）「高等学校地理歴史科における、生徒自らが問いを立てる力を段階的に育む授業の開発」『早稲田大学教職大学院紀要』第13号